



目次

ごあいさつ	2
昭和62年度第30回通常総会報告	3～5
支部・同窓会だより	5～6
我が師に学んだこと	7～9
校友短信	10
キャンパスミニメモ	11
昭和63年度入学案内 事務局だよりなど	12



金山橋付近から工学部を遠望する（62年8月）
 右から阿武隈川の河川敷、堤防、
 日大通りのポプラ（カロリーナポプラ）の並木、
 中央の森の上に建設中の8階建の建物



ごあいさつ

日本大学工学部長
本郷 忠 敬

工学部校友会は昭和33年に発足して以来、幾多の困難を乗り越えて、常に学部とともに一体となって運営され、校友27,000名の心のよりどころとして立派に成長してこられたことを、校友各位とともにお慶び申し上げます。

私こと、このたび多数の教職員の支持を得まして、学部長に再選され、7月17日付をもって2期目の学部長を務めることになり、身の引き締まるものを感じています。3年前に初めて学部長に就任したときの初心に戻って、教育・研究を中心とする学部の管理・運営にいつそう精魂を傾ける決意です。

日本大学は明治22年に時の司法大臣山田顕義先生によって日本法律学校として創立されて以来、昭和64年で100周年を迎えます。これは大学として大きな節目であり、100年の伝統を基礎として、さらにいつそうの飛躍を期待すべく、盛大な記念式典・創立者の顕彰・国際記念会館の建設など盛沢山の記念行事が実行委員会を中心に検討されています。

また郡山学園も本年度で開設40周年を迎えます。工業技術立県をめざす福島県の強い要請により、東京の駿河台の現理工学部校舎に併設されていた旧制の専門部工科が現在の郡山の地に移設されたのが昭和22年です。昨今、大学の地方分散による教育の機会均等を図るために、各地方自治体が競って大学誘致を名乗り出しています。また各大学も次第に地方に進出しつつあるとき、当学部はすでに40年前にこの地に進出し、数多い都市型大学のうちでも、地方に進出した先駆者ということになります。古い校友の方々には、荒廃たる旧海軍航空隊の兵舎の跡を思い出されることでしょうか。それが先人各位の並々ならぬご努力により、当時想像もできなかったほどのすばらしい学園に成長発展することができました。それは決して平坦な途ではなく、起伏の多いものでした。これまでの先人の偉業に対して、改めて敬意を表するものです。

工学部の40周年記念行事として、今秋10月には記念式典を盛大に行います。またこれを機会に、最も重要な工学部40年史および権威ある教養講座講演集などの記念出版を予定しています。さらに記念建造物としては、工学部のシンボルタワーとしても相応しい一般教育・情報関係研究棟(地上8階建、延面積約6,000㎡)の建設を行っています。竣工は明年4月の予定です。40年を1つの基点として、決して現状に満足することなく、次の工学部50周年に向けて、大いなる発展を期待しています。

終りに、校友の皆様のみますますのご健勝とご活躍を祈念して挨拶とします。

(日本大学教授・工博・工学部校友会顧問)



ごあいさつ

日本大学工学部校友会会長
武田 仁 幸

校友諸氏におかれましては御健勝のこととご拝察申し上げます。

さて、私は昭和59年4月、皆様のご推挙によって本会の会長職を賜わり、3年間の任期をつつがなく勤めさせて戴きましたが、これも一重に校友の方々ならびに関係者のご支援ご指導があったればこそと衷心より御礼申し上げる次第であります。

更にまた、昭和62年度通常総会の議により、再び会長職を命じられました。誠に身に余る光栄と襟を正しておりますが、もとより浅学非才の身でありますれば旧来にも増して皆様のお力添えとご鞭撻なくしては重大な本職を全うすることはできません。何卒校友各位におかれましては今後ともご高声下さいますよう伏してお願ひ致します。

ご承知のとおり、工学部校友会の歩みは極めて順調であります。常に現実の推移に目を向けていないと組織の活力を失なってしまいますから、将来のために何処を、どのように変革すべきかを今日考えねばなりません。本会の会員掌握率は80%であり、同類の会としては驚異的な高率であります。加えて名簿等にみる会員管理は他の範ともされております。

この事実を基に、私は次のことがらを提唱致したいと存じます。第1は校友会員が2万7千余名となりましたので、総会運営は事実上不可能でありますから、合理的な代議員制を採用すべきであると思ひます。第2は学生諸君の就職の件であります。母校の発展は潜越ながら校友の社会的評価の向上なくしては期待できません。就職率もさることながら質的な点や定着率などについても意を注ぐべきでありましょう。そのために必要な求職活動の場を提供したいと思ひます。第3は支部設置の推進であります。現在、北海道、東京、東海、四国、九州の5つの支部がありますが、将来の会員増に備えて組織の強化充実を計らねばなりません。第4は校友子弟の母校への進学であります。昭和67年以降は人口構成から進学者の減少が予想されますが、子弟の母校入学を援けるような方策を検討したい。第5は記念事業への参加であります。工学部では本年郡山開設40周年を迎えて記念事業を計画しております。また時を近くして2年後には日本大学創立100周年記念事業が行われます。重なる慶事に応分の参加をするよう総会の議でも示唆を戴きましたので目下検討中であります。終りに皆様のご健康とご精進を祈念してご挨拶いたします。(土木工学科3回卒、東和工業株)

昭和62年度第30回通常総会報告

省りみれば昭和22年に工学部が郡山に移設されてからすでに40年の歳月が過ぎ去りました。

この間、世相は変転を極め、戦後の混乱の中で巣立った世代、所得倍増の経済発展期に社会に勇飛した時代、その後訪れたあの旧来の価値観を超越し、精神的な変貌と新世代への脱皮を求めた学園紛争当時の世代、そして現在の経済と技術にかかわる国際的混迷の時代に学窓を離れた世代など、同じ日本大学工学部の出身であると申しても、これらの影響を受けて、胸中にはそれぞれのものがあると存じます。

寮歌にも唱った豊かな資源のみちのくの地も、もはや、産業構造の極変の最中では一人孤高を保てる筈もなく、広くは東北大学を中心としたインテリジェントコスモスに代表されるように、また狭域では、昭和61年12月3日付で郡山市がテクノポリス指定地区に選ばれたように、自力による活性化を獲得せねばならない時代に至りました。

日本大学工学部は、今こそ40年の存在意義をかけて地域社会の要請に応えるべきでありましょう。



さて、標記総会は、統一地方選挙告示の前日、4月18日(土)午後2時より5時40分まで、日本大学郡山研修会館にて、会員多数の出席のもと開催されました。総会は、半沢副会長の開会のことばで始まり次いで、武田会長より以下の要旨のご挨拶がありました。

本日は春たけなわ桜も満開の季節、また明日は統一地方選挙告示等お忙しいところ多数の方々のご出席を感謝いたします。本年は工学部開設40周年、日本大学創立100周年も2年後に控え、またこの総会も30回を数えます。今後とも、校友会を愛し、ご協力下さいますようお願い致します。

この総会を機に各科の同窓会などが開かれ、懐しい面々も多数出席されております。また本年の入学試験受験者は過去最高で新入生も1,244名の多きに達したことや、学内には40周年記念棟が建設中であることや、地域産業界が、工学部のテクノロジーに強い関心と期待

を抱えていることなど、母校の今日の姿を全国の校友諸君に伝えて下さい。総会ではきいたんのないご意見を戴き、また懇親会では大いに旧交をあたためていただきたいと思っております。

次いで議長に、佐藤幸助(土3回)氏を選出し、ご挨拶の後、議事録署名人に、佐藤司(土5回)石井和樹(土13回)、書記に、福井均(土19回)曾部忠義(電20回)の各氏を選び、議事に入った。

- 議事は、報告第1号 昭和61年度会務報告について
- 承認第1号 昭和61年度一般会計収支決算について
- 承認第2号 昭和61年度特別会計収支決算について
- 議案第1号 昭和62年度事業計画について
- 議案第2号 昭和62年度一般会計収支予算について
- 議案第3号 昭和62年度特別会計収支予算について
- 議案第4号 役員選出について

これら議事にかかわる結果は次のとおりであります。

報告第1号は佐藤光正(機9回)事務局長より会務、会員の状況の報告と、小川敏彦(化14回)経理部長より財産の状況について報告があり、異議なく承認された。

承認第1、第2号は小川経理部長より一括して提案と説明があり、次いで、小栗治男(建7回)会計監査が監査員3名を代表して監査の結果適正と認めるとの報告があり、特に質疑もなく承認された。

議案第1号は、武藤貞泰(土8回)副会長より提案説明されたが、伊藤宜世(電14回)理事の協力で、工学部創設40周年記念事業として、校友会より工学部にパラポアンテナとその視聴周辺機器を寄付する件で若干の質疑があった、これに対し会長より世界のニュースを直接受信することができるメディアが学内に存在することの意義は極めて大きく、この受信電波の汎用性と学術的意義も時局柄注目されているとの説明があり、提案どおり承認された。

議案第2号、第3号は、小川経理部長より一括して提案説明があり承認されたが、各支部から支部代表で総会に出席する代表2名程度の者への旅費の支給を考えて下さいとの要望があった。

これに対して会長より、生産工学部や理工学部で実施しているような、代議員制度の採用も次代の方々のために考えなくてはならないので、これと併せて検討したいとの説明があった。ちなみに会員数は正会員27,036名、専門部会員363名、準会員5,039名、計32,438名である。

議案第4号は、武田会長より昭和62年度役員選出にともなう候補者がなかった旨の報告があり選考議事

に入った、役員はマンネリ化を避けるため他の地域からも選んで欲しいとか、支部活動をもっと理解して欲しい、会長になる方は支部総会に出席できる人であって欲しいなどの要望があったのち、会則にもとづき選考委員会を設けて5ページのとおりに選出された。

以上で全議案、議事が議決承認され、武藤副会長の閉会の挨拶をもって総会は終了した。



引続き懇親会に移り、会長の挨拶と新役員を紹介の後、工学部長本郷忠敬、日本大学本部人事部長石田昭二、工学部父兄会長鈴木洋の各氏より来賓のご祝辞をいただき、工学部事務長鈴木謙二氏のご発声で乾杯し祝宴に入った。

テーブルスピーチでは、本年も兄弟校の校友会から工科校友会会長加藤利男氏、ならびに生産工学部校友会会長三好康夫氏のご出席をいただき、それぞれの校友会の近況などを伺った。

また宴も進むほどに、校友諸氏からも種々お話があり豊かな話題に時の過ぎるのも忘れた。

特に本年は工学部開設40周年の年であり母校を訪ねる会も一段と熱が入り、多くの校友を迎えたいものと異口同音に秘策を語り合った。

終りに下里正美(土19回)氏の音頭で校歌を合唱し、佐藤幸助氏の方寸三唱で幕を閉じた。



昭和61年度一般会計収支決算書

収入		単位円 △-減			
款項	種目	予算額	決算額	比較増減	附記
会費	1 終身会費	10,000	10,180,000	10,170,000	
	2 入会金	10,000	11,630,000	11,620,000	
	計	20,000	21,810,000	21,790,000	
繰入金	3 前年度繰越金	18,399,243	18,399,243	0	
	計	18,399,243	18,399,243	0	
繰入金	4 基本財産より繰入金	4,690,000	4,690,000	0	
	計	4,690,000	4,690,000	0	
雑入	5 預金利息	500,000	738,131	238,131	
	6 職員負担金	300,000	300,305	305	
	7 名簿代金	10,000	53,409	43,409	
	8 雑収入	757	180,009	179,243	
計	810,757	1,271,836	461,079		
合 計		25,920,000	46,171,079	22,251,079	予算(決算比) 193.7%

歳出		単位円 △-減					
款項	種目	予算額	歳用増減額	予算現額	決算額	比較増減	附記
事務費	1 給料手当	4,030,000	0	4,030,000	4,028,064	△ 1,936	
	2 役員料	480,000	0	480,000	458,948	△ 21,052	
	3 交通費	460,000	0	460,000	458,000	△ 2,000	
	4 旅費	60,000	0	60,000	41,660	△ 18,340	
	5 交際費	400,000	16,110	416,110	416,110	0	増費より
	6 消耗品費	100,000	0	100,000	91,084	△ 8,916	
	7 備品費	130,000	0	130,000	130,000	0	
	8 印刷製本費	120,000	0	120,000	118,050	△ 1,950	
	9 通信運搬費	310,000	0	310,000	301,630	△ 8,370	
	10 修繕維持費	10,000	0	10,000	0	△ 10,000	
	11 光熱水費	40,000	0	40,000	30,000	△ 10,000	
	12 雑費	150,000	△ 16,110	133,890	128,800	△ 5,090	交際費へ
計	6,290,000	0	6,290,000	6,202,946	△ 87,054	予算(決算比) 98.7%	
事務費	13 組織対価費	500,000	0	500,000	400,000	△ 100,000	
	14 会報発行費	5,910,000	0	5,910,000	5,786,847	△ 123,153	
	15 会員管理費	1,930,000	0	1,930,000	1,874,040	△ 55,960	
	16 名簿作成費	420,000	0	420,000	416,634	△ 3,366	
	17 下宿対価費	10,000	0	10,000	8,280	△ 1,720	
	18 同井俱与費	500,000	0	500,000	500,000	0	
	19 式典費	2,040,000	0	2,040,000	2,028,730	△ 11,270	
	20 母校訪問費	180,000	0	180,000	179,610	△ 390	
事務費	21 音頭補助機関費	850,000	0	850,000	850,000	0	
	22 旅費	480,000	0	480,000	410,970	△ 69,030	
	計	12,820,000	0	12,820,000	12,455,111	△ 364,889	予算(決算比) 97.1%
	23 総会費	470,000	0	470,000	463,560	△ 6,440	
会議費	24 役員会費	400,000	0	400,000	363,350	△ 36,650	
	25 連絡協議会費	460,000	0	460,000	376,180	△ 83,820	
	26 旅費	830,000	0	830,000	823,210	△ 6,790	
計	2,160,000	0	2,160,000	2,026,700	△ 133,300	予算(決算比) 93.8%	
繰入金	27 前年度繰越金	250,000	0	250,000	247,200	△ 2,800	
	計	250,000	0	250,000	247,200	△ 2,800	予算(決算比) 98.9%
積立金	28 積立金	2,000,000	0	2,000,000	2,000,000	0	
	計	2,000,000	0	2,000,000	2,000,000	0	予算(決算比) 100%
予備費	29 予備費	400,000	0	400,000	0	△ 400,000	
	計	400,000	0	400,000	0	△ 400,000	予算(決算比) 0%
合 計		23,920,000	0	23,920,000	22,991,957	△ 928,043	予算(決算比) 96.1%

収入額 50,171,079円
 歳出額 22,991,957円
 差引残高 27,179,122円(51年度繰越金繰越のものとする。)

財産の状況(昭和61年度3月31日)

基本財産	引当財産	運用財産	合 計
5,663,188円	2,645,442円	26,403,582円	34,712,132円

日本大学工学部校友会役員名簿

役名	卒業	氏名	勤務先	役名	卒業	氏名	勤務先
顧問		本郷 忠敬	日本大学工学部(工学部長)	評議員	機9	河井 宏文	日本大学工学部機械工学科
参事	土1	渡辺 幸夫	福島県住宅供給公社	〃	電12	加藤木 研	郡山市総合体育館
〃	電1	国分 欽智	日本大学工学部電気工学科	〃	土13	石井 和樹	日本大学工学部土木工学科
〃	電2	関根 昭一	郡山北工業高等学校	〃	建14	渡沢 正典	日本大学工学部建築学科
〃	機2	菅野 宗和	日本大学工学部機械工学科	〃	土16	加藤 定信	加藤建設(株)
〃	化2	後藤 尚	日本大学工学部工業化学科	〃	電16	鈴木 守	日本大学東北高等学校
〃	化2	菊地 光子	〃	〃	化16	野尻大五郎	郡山市水道局堀口浄水場
〃	化3	高野 操	〃	〃	建19	田中 敏夫	郡山市役所建築課
会長	土3	武田 仁幸	東和工業(株)	〃	機19	森谷 信次	日本大学工学部機械工学科
副会長	化6	半沢 忠	パラマウント硝子工業(株)	〃	化19	野田 吉弘	日本大学工学部工業化学科
〃	土8	武藤 貞奈	郡山市役所公園緑地課	〃	化20	日下部 良	日本パーオキサイド(株)
事務局長	機9	佐藤 光正	日本大学工学部機械工学科	〃	土21	渡辺 信一	郡山市水道局配水課
経理部長	建3	木村 圭二	郡山市田村支所	〃	建21	堀井 勝典	(株)遠藤義男建築設計事務所
理事部長	土12	村田 吉晴	日本大学工学部土木工学科	〃	電21	池上 秀幸	郡山市水道局浄水課
理事部長	土3	松山 光克	郡山市水道局建設課	〃	機24	馬場 隆司	(有)馬場鋳造所
理事部長	土3	太田雄八郎	郡山市湖南支所	〃	土25	藤川 英敏	郡山市役所土木建設課
〃	土6	佐藤 吉新	鞆共立水道コンサルタント	〃	土26	杉崎 一馬	(株)郡山地質調査事務所
〃	電14	伊藤 宣世	オーディオ開成(株)	〃	化27	水品 幸意	(株)常電舎
〃	化14	小川 敏彦	日本大学工学部工業化学科	〃	土29	小野信太郎	日本大学工学部庶務課
〃	電16	伊藤 義人	郡山市水道局建設課	東京支部長	土3	古村 和夫	古村建設(株)
〃	電20	曾部 忠義	郡山市水道局建設課	東海支部長	土3	平野 卓	東京エンジニアリング(株)名古屋支社
〃	建21	久野 清	久野学園	北海道支部長	土10	佐々木義則	江別生コンクリート(株)
会計監査	土3	佐々木 崇	鞆片山鉄工所	九州支部長	建8	矢保 敷之	(株)大林組福岡支店
〃	電8	国分 義功	郡山北工業高等学校	四国支部長	土8	谷久 嘉典	(有)谷久工務店
〃	建10	橋本 寛	日本大学工学部建築学科	事務職員		影山 英雄	事務局
評議員	建8	古橋 栄吉	日本大学東北高等学校	事務職員		河内美知子	事務局

支部・同窓会だより

支部総会

●四国支部総会(第3回)

62年7月15日(水)

高松市 わたや旅館

参加会員 40名

本部から 武田仁幸会長

来賓 小倉 崑教授ら7名

●九州支部総会(第8回)

62年7月17日(金)

福岡市 博多城山ホテル

参加会員 60名

本部から 武田仁幸会長

来賓 後藤 尚教授ら9名

●東海支部総会(第17回)

62年8月8日(土)

名古屋市 ホテルキャッスルプラザ

参加会員 40名

本部から 武田仁幸会長

●北海道支部総会(第14回)

62年7月18日(土)

札幌市 ノースシティ

参加会員 50名

本部から 武田仁幸会長

来賓 中野富士雄教授ら7名



ワンゲル結成25周年

佐々木 洋 志

ワンダーフォーゲル部が日大工学部に生れて、25年を迎えた。半世紀の間に、ワンゲル活動を通して青春を燃やし、山・草花・雪そして人に恋して社会人となった仲間は200名を越えている。先輩が残した「ふみあと」を受け継ぎ、それを続けていることのすばらしさが、25年という時間の中に潜んでいる。

61年10月11日～12日に、現役とOBが企画したワンゲル25周年記念行事が行なわれた。初日は現役とOBとでの記念ワンデリングで、小雨降る安達太良山に登った。夕方からは郡山市愛宕町の研修会館で、記念式典、OB総会が行なわれた。

25年前の結成時から、学外顧問として、また部員の人生の相談員であった、秋田歯科医院の秋田陽一郎先生に、記念品をおくり、長年の労をねぎらった。そして今後のご指導も改めて申し上げた。機械工学科の菅野宗和先生、開成病院の高橋文治先生のほか、片山善重先生からもご指導いただけることになった。

想えば、今はない古い55号校舎前の芝生でミーティングを行ない、学生ズボンのまま登り歩いたワンゲル初期の頃、現在はりっぱな部室があり、山の装備も完備し、めざす山の高さも歩く距離も、合宿のスケールも大きく進歩している。OBと現役の年の差だけでも親子程ある25年という時間の間に、ワンゲルは大きく成長してきた。海外遠征という企画も飛び出す程の今後が楽しみだ。とりあえず、30周年へ向けての現役とOBが一体となった活動がある。同じ釜のめしを食い同じ目的に向かって、ワンゲルがますます発展することを祈ってやまない。ワンゲルは、10周年記念には、磐梯山頂に方位板を建立し、20周年記念には、開成山公園にアメリカ花水木の記念植樹をしてみました。

(土木14回卒、PL教団町田教会長)



秋田顧問とOB。第3歩と第4歩

機械工学科12回卒同級会

日向 正 博

61年10月4日、東京市ヶ谷の私学会館において、首

都圏在住者を対象にした第3回クラス会を開きました。会には、恩師の菅野宗和教授をお招きし、多数の初参加者も含め、総数37名が集い、盛大に開催しました。

卒業して22年がたち、久しぶりに会う顔に懐しみながら、菅野先生より母校のめざましい発展ぶりや先生方の近況等をお聞かせいただいた後、各氏の近況報告や思い出話で、予定時間をオーバーする盛況ぶりでした。次回は12回卒業生全員を対象に行なうことを約して散会しました。
(機械12回卒、三機工業株)



母校を訪ね、「高分子研究室22回卒生」同級会を開催

今 泉 真 二

昭和62年7月4日(土)、午後梅雨の合間の晴天に恵まれ、高分子研究室を10名で訪ねました。前学期試験、土曜日にもかかわらず卒研生は勉学に励んでいた。我々の場合はどうだったのかなど、話し合いながら武者先生の案内を受け、なつかしき学び舎を見学した。大変貌した実験棟、施設、設備の充実には驚嘆させられました。その夜は、郡山研修会館にて、武者、佐藤(良)両先生を囲み各自の近況報告に入り、何時しか、酒と話に酔い知れ時を忘れる同級会となった。「二次会」との声で思い出深い市街へ繰り出した。誰となく校歌を口づさみ大合唱となり一時の学生に酔い知れた思いがしました。

翌日、全員で学生時代にご指導を頂いた故片山将道教授の御冥福を心からお祈りし、次回の開催と再会を約束し散会しました。(化学22回卒、郡山ケミカル株)





我が師に学んだこと

レーモンド設計事務所主幹 三浦敏伸
新日本建築家協会会員

1.はじめに

私は瀬戸内海に面した古い港町広島県尾道において少年期を過した。寝転んでも広々と拓けた紺碧の海に幾多の小島が浮び、はるか四国山地の山並を眺めることができたし、街全体が南斜面で、すぐ背後にはみかん畑の山々が迫り、朝夕鳥々を縫うように行きかう船の汽笛が聞こえて長崎に似た恵まれた自然の環境であったと思う。又古都奈良のように千光寺や浄土寺をはじめとする百数十の古寺があり茅葺の家や土蔵のたたずまい、これらの事柄がすべて建築をつくるうえで私の心の原風景となって今でも残像しているように思う。



建築学科在学中は発足まもないレスリング部と建築研究会に所属し、学部祭において展示するパネルや模型造りを毎晩のように徹夜をして、当時新発売されたインスタントラーメンをすすりながら創作した「ブラジリア」展は今でも印象深い思い出であります。

この時に谷川教授に指導を受け又一年先輩に石沢克夫氏がいたし同級に村岡賢治、植田厚、水野智男、松本新作、山上薫、鹿毛恭二、田中洋子などの俊才がいた。なかでも私の無二の親友であった村岡賢治氏は、残念ながら現場事故の後遺症にて亡くなられたのは痛恨の極みであった。

レスリング部においては現在埼玉県議会議員として広く活躍している栗原稔氏がキャプテンをしていた。その時にきたえた肉体が今でも遺産として残っており感謝している次第であります。

かくして学部卒業後、レーモンド設計事務所に挑戦したところ運よく入れていただけた。以来、早や20年が経過し建築設計に没頭しておりますが、この間、アントニン・レーモンド及びレーモンド設計事務所において体験した建築について述べさせていただきます。

2.アントニン・レーモンドの生いたちと生涯

A・レーモンドは1888年、チェコスロバキア（ボヘミア）のグラドノにて生まれた。

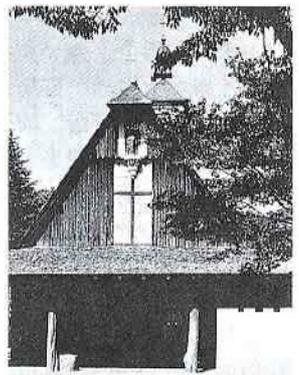
1910年にプラグ工科大学を卒業ののちアメリカに渡りカス・ギルバートの建築事務所に入り、4年間その事務所においてドラフティングを中心に過ごしたが

ニューヨークの生活にあきたらなくて再びヨーロッパに遊学の旅に出、フランス、イタリアを中心に絵画の勉強に励んだ。その時にナポリにおいてノエミ・ベルネッサンと知り合い結婚した。すなわちミセス・レーモンドは大変やさしい女性で事務所ではインテリア・デザイナーとして活躍していたが私達はいつも「おばあちゃん」といって敬愛していたものである。(写真)

1916年にタリアセンのフランク・ロイド・ライトの元に行ったがこの時ライトは48才の働き盛りであったが、アメリカの一般大衆には建築家としてはまだ無名であったという。

1917年、第一次世界大戦が始まりヨーロッパ戦線においてアメリカ陸軍軍事外交官としてドイツ軍と戦った。大戦後の1919年にニューヨークにて独立して設計事務所を開設したが、フランク・ロイド・ライトの誘いにより帝国ホテルの設計監理のために1919年12月31日にライトと共に来日した。この時30才であった。

そして、ライトの片腕として多数の透視図やスケッチや詳細図等を描き帝国ホテルも完成しつつあったがその途中でライトと別れ翌年独立してレーモンド設計事務所を設立し、星商業学校及び当時東京市長であった後藤新平の住宅を設計し日本における設計活動を本格的に始めたのである。



1921年、東京テニスクラブ、東京女子大学等を設計したがA・レーモンドはライトに対し反抗していたにもかかわらず、ライトの強い個性の影響を受け、「ライト調」から逃げ出すことが出来なかったと後に述懐していた。

1923年9月1日、関東大震災の時は当時事務所のあった東京会館ビルにいた。丁度その日が帝国ホテルの全完成を祝うオープンセレモニーが予定されていたが帝国ホテルは一部が地盤沈下を起こしただけで被害は軽微であったという。

これ等のことはライト研究者で知られている谷川教授から同様の事を詳細に話されておりました。

その後、多くの実業家にも恵まれ、東京ゴルフクラブ、聖ロカ病院、アメリカ大使館、ソビエト大使館、フランス大使館、イタリア大使館、聖ポール教会(写真)等数

々の日本近代史に著名な作品を連続して完成した。

1935年には、後に日本を代表する建築家となった前川国男、吉村順三等が新たに事務所に加わり東京聖心学院、川崎守之助邸、フォード自動車組立工場(計画)、軽井沢夏の家等続々と設計した。

しかしながら1936年頃より日米間は外交的に緊迫を高めたため、1937年にインドに渡りボンデシェリーにおいて僧院の設計活動をしたものであり、スリ・オーロピンドの僧院宿舎は海外における名作の一つで今なお現存している。

第2次大戦中はアメリカにおいてペンシルバニア州ニューホープにアトリエをもち主に住宅等の設計を行っていたが、事務所は一時休止状態に入った。

戦後、A・レーモンドは再び来日し、最初に手がけた仕事は福島県只見川ダムの電源開発計画であり、後に大土木設計会社になったパシフィック・コンサルタツの初代社長となり日本土木設計においても多大の貢献をした。

さて、戦後の荒廃の中で再びレーモンド設計事務所の活動を開始し、1949年にはリーダーズ・ダイジェスト日本支社を設計し、そのデザイン、構造、施工技術の面において日本建築界の戦争中の空白を一挙に埋め近代建築史の第1ページを飾る重要な作品となって、第1回の日本建築学会賞を受賞した。

そして、銀座のヤマハホール、八幡製鉄体育館、聖アンセルモ教会、聖アルバン教会、国際キリスト教大学、イラン大使館、群馬音楽センター、名古屋の南山大学、松坂屋銀座店、埼玉の立教高校、四谷の上智大学等、幾多の有名建築を設計しその範囲は住宅、教会学校、病院、工業とデザイン全域におよび日本の近代建築に多大の影響を与えた。

私が入所した1967年にはハワイ大学の計画案、イスラエル大使館、チェコスロバキア大使館を、又1973年には韓国大使館を設計したが、翌年A・レーモンドは病いのため、ついに長年にわたってその作品を数多く残した日本を離れ帰米したが、その時再び会えぬ大建築家アントニン・レーモンドを見送るため、羽田国際空港で最後の別れをしたのを今でも鮮明に記憶している。

そして、1976年10月26日ニューホープのアトリエにおいて88才の生涯を閉じたのである。

私がA・レーモンドに接した期間は約10年間であったが設計に対するきびしさと、自然主義、構造意匠主義について建築の基本を学んだことはレーモンド設計事務所においても最後であったように思う。

3. 田辺博司と私

先に述べたように私がレーモンド設計事務所に入所したのは、1967年であり事務所は当事西麻布の一隅にあり、建物は木造丸太造りであった。一部がレーモンド夫妻のアトリエ兼住宅となっており、残りの部分が

設計室であったがそこに45名程の所員がいたように思う。広い前庭にはプールがあり周りは四季を通じて草花が咲きほこっていた。夏の暑い日の昼休みにはそのプールでよく泳いだものである。

入所して現レーモンド設計事務所所長である田辺博司の元で当時大プロジェクトであった日本競輪学校及び日本サイクルスポーツセンターの修善寺の現場に赴き、その後、竣工するまで3年間そこで現場監理業務の勉強をさせられたのであるが、建物の大部分がコンクリート打放し仕上げであったため、連日続くコンクリート打設時には私も竹棒をもってコンクリートを腕が棒ようになったのを今思えば良き思い出となっております。それこそ自分の分担の部分のコンクリートがジャンカでもあったら大変な目に合うので、「さぼる」ことは到底出来なかった。

最近の若い所員にこのような体験談をしてもそれは遠い昔話としか思われぬのは大変残念なことである。

その後設計部に戻りA・レーモンドと田辺博司両氏のレーモンド設計事務所を代表する強烈な個性派の建築家の元で「レーモンドスタイル」を学びそれ等を会得するまでに20年の歳月が流れた。A・レーモンドの没後は石川恒雄から田辺博司へと継承され事務所も麻布から代々木に移転しその規模も拡大を重ね現在は所員100名を越えるデザイン事務所となった。

その間、第百生命九条山荘、富士ヘルス&カントリークラブ、茨城県立守谷高校、茨城県立協和養護学校伊豆高原いずみごうプラザホテル、日本システムウェアビル等のほか数々の設計を田辺博司の元で行なった。

これらの中で茨城県立守谷高校(写真)は基本設計より監理に至るまで本学部出身の茨城県庁営繕課技師である所英雄氏と共にコンセプト創りを進めたものであり、その作品は既成の学校スタイルとは異なり傾斜地を利用



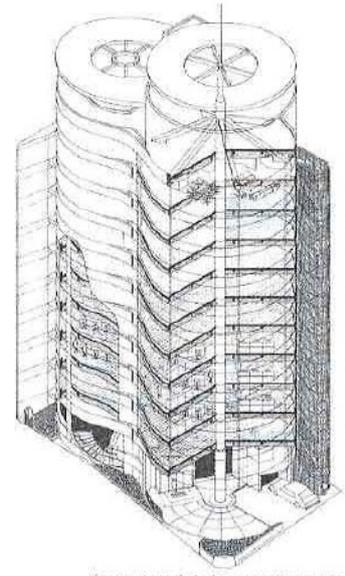
し、教室1ブロックは2教室1単位とし、下層の一層を1スパン前方にせり出させ、これによって生じた2階テラスは2階部分の前庭として、人工的な外部空間として生まれ変わり、単なるバルコニーの域を越えて教室の外と内は一体化されて、広がりゆとりのある教育環境を創出したものである。

そのテラス部分には、植栽や観察用の施設及びベン

チ等を設け、生徒達がテラスの人工芝の上に座り込み昼食をしたり、談話を楽しんでおり、やすらぎの場として十分に生かされている。

又教室棟の間に生じた外部空間は中庭、広場、野外学習、集会広場あるいはステージを設けた野外音楽広場等、多目的な利用を可能にしたものであり、その配置計画と共に学校教育の場として新しいコンセプトを創り、これらに続く県内外の学校施設に太いなる影響を与えたものと思っています。

又最近の田辺博司の設計により私が担当した作品として国内において初めて試みられた、スーパーストラクチュア・ガラス・シーリング工法と世界で初めての12層吊り床構造を採用したスーパーインテリジェントビルである日本システムヴェアビルを紹介します。敷地は渋谷から山手線の外に向かって伸びる国道246号線に面した渋谷駅から歩いて5分位という場所である。設計に当っては平面プランと構造を一体化する設計コンセプトを主標とし新しい構造手法、新技術を開発し採用することにした。(写真三葉)



まず第1は、構造特性である中央1本柱(径800mmのGコラム)によって12層の床を吊り構造とした。ロスのボナベンチャーや銀座三愛などに類似のビルが存在するが、これらは中央構造核からのハネ出しで、この建物とは本質的に異なるものである。

構造設計家木村俊彦氏の協同を得てトライしたこの構造は地震国においては不可能とされていたがコンピューターの進歩により実現出来たものと云えよう。

第2の特性は外部円筒シリンダー、すなわちカーテンウォールに表現した大型ハーフミラーガラス使用のストラクチュア・ガラス・シーリング工法である。

これだけの大規模な複層曲げガラスについては先例がないため、日本軽金属のサッシュ工場において耐震耐風圧実験を行なった結果、層間変位40%まで安全を

確認した後、製作したものである。

以上の様な工法により熱線反射及びペアーガラスによる省エネ、遮音性、デザイン性を確保することができ、ニューメディアに対応する事務所内部の居住性を高めたものである。

事務所内部はオープンシステムによるデスクレイアウト、OA機器からのLAN、VANに至るまで高性能のデジタルPBX、通信ネットワーク等いわゆるインテリジェントビル機能としてのテレコミュニケーション機能も備え、さらに空調システム、セキュリティシステムなど対応している。

このように未来は今まで四角いものと決まっていたオフィスビルの概念を打破し高性能インテリジェントビルが続々と建てられる時代が来つつあり、このビルの出現がこれからの他の建物に与える示唆も大きいものに違いないと確信するものであります。

又、この特殊鉄骨構造の施工に際して本学部出身の先輩である東急建設設計総括構造本部の木村克次氏が参画されました。

4.おわりに

レーモンド設計事務所の本学部出身の先輩に田島達也氏がおり、私よりA・レーモンドに長い間接しており最近では琵琶湖の湖畔に出現したラフォーレピワコを設計し、第一線の建築家として活躍しており、私も多大の影響を与えられている。又後輩には小沼悟がおり私の元で「レーモンドスタイル」を学んでおり私の後を継承してくれるものと期待しているものである。

アントニン・レーモンド夫妻が逝って10年、田辺博司氏の元で建築を学んだ20年、私の血となり肉となったデザインコンセプトによって今までの精神的原風景を糧としながら新たな建築の創作にはげむつもりであります。

(建築学科第四回卒)

校 友 短 信

(校友会の事務局へのお便りや、連絡などから)
無断で掲載いたしました。ご了承ください。)

土木工学科

◆**鈴木照四止** (2回卒、浅野工事㈱営業本部営業部長)
転勤を重ね、16年振りに我が家に戻りました。仙台
在勤中は武田会長さん始め、皆様にお世話様になりま
した。校友会の発展を祈ります。

(61. 9. 24受)

◆**藤崎隆彬** (11回卒、南九州道路サービス㈱)
61年1月31日で日本道路公団を退職して、高速道路
の維持管理を行なう今の会社で働いています。

(62. 3. 31受)

◆**小針美彦** (14回卒、建設省関東地方建設局京浜工事
事務所河川環境課)

61年7月、多摩川サミット、10月、多摩川下ナウ川
友好河川の締結、などと河川環境に取り組んでいます。

(61. 10. 6受)

◆**小木曾充浩** (32回卒、自岩工業㈱神谷橋作業所)
現在、営団地下鉄の神谷橋三工区 (フジタ工業) で
地下鉄工事に従事しています。

(62. 3. 25受)

建築学科

◆**平島正昭** (8回卒、防衛施設庁施設部施設企画課)
校友会報の研究棟完成図、テクノポリスの計画など
楽しく読みました。なかでも東北大学野球連盟のアメ
リカ遠征に7名の学生が参加された記事に、昭和30年
代前半を硬式野球部に所属して、インカレなどに参加
した頃を懐かしく思い出しました。

◆**狩野幸司** (14回卒、労働省労働基準局安全衛生部安
全課、主任技術審査官)

2年半にわたる海外勤務 (シンガポール共和国労働
省国家生産力局での生産性向上プロジェクトの専門家)
を終え、61年11月に帰国しました。

日本シンガポール両国の協定に基づく政府間の技術
協力であり、シンガポールの「Learn from Japan」
政策に応えるものです。日本の生産性運動というソフ
トウェア第1号の技術移転であり、アセアン各国が注
目しています。

(62. 1. 20受)

◆**橋口 章** (14回卒、ブラジル戸田建設)
61年10月の「第6回母校を訪ねる会」に出席させて
いただきありがとうございます。今回、ブラジル国
サンパウロ市のブラジル戸田建設に転勤することにな
り、昨秋の母校訪問は大変良い思い出になりました。

(62. 4. 1受)

機械工学科

◆**宮田健児** (14回卒、福島技能開発センター訓練課)
第6回母校を訪ねる会に参加でき、当時の思い出を
秘めながら、改めてその感激を味わっているところ
です。懐かしい諸先生方はじめ、当時の資料展示など、
またキャンパスの発展ぶりに何か (希望・勇気……)
を与えて下さいました。

(61. 12. 1受)

◆**川原利夫** (17回卒、岩手県立釜石工業高校機械科)
母校の発展はありがたいのですが、最近の後輩の学
生を送り出そうにもなかなかむずかしいようで困っ
ています。

(61. 10. 11受)

◆**栗本京一** (20回卒、トヨタ自動車㈱技術管理部)
3年間のアメリカ赴任を終え、2年前に本社に帰っ
てきて、現在第4技術課にいます。

(62. 1. 29受)

◆**海野和雄** (22回卒、静岡瓦斯㈱製造課製造係)
現在、都市ガス高压プラントの保全 (定期整備) を
担当しております。材力・熱力・金材など、今考える
と学生時代の勉強のたりなさを反省させられています。

(61. 9. 24受)

◆**木下久史** (27回卒、北海道電力㈱火力部火力計画課)
当社社内においても「北電桜工会」(理工、生産工も
含む) を定期的に開いて懇親を深めております。

(61. 9. 22受)

電気工学科

◆**堀之内新** (14回卒、神鋼電機㈱伊勢工場システム事
業部技術部)

リニア搬送システムのシステムエンジニアリング
を主な業務にしています。リニアインダクションモー
ターでは、大平先生にいろいろお世話になっています。

(61. 10. 13受)

工業化学科

◆**関谷 隆** (14回卒、太陽酸素㈱特殊ガス営業本部厚
木工場品質管理課)

特殊材料ガスの製造に従事しています。

(61. 10. 21受)

◆**千葉甲子** (14回卒、福島県立郡山北工業高校)
62年3月の教職員の人事異動で、小高工高から郡山
北工高に転勤になり、20年ぶりで郡山にもどってきま
した。

(62. 3. 28受)

CAMPUS

—mini—MEMO—

◇工学部長に本郷教授が再選

任期満了に伴う、次期工学部長選挙が5月28日に行なわれ、本郷忠敬（ほんごうただよし）学部長が再選されました。就任は62年7月17日で、任期は3カ年です。

◇校友の母校での教員

昭和62年4月1日付で昇格されました。

助 教 授：倉田 光春（建17回卒）工博

専任講師：古河 幸雄（土23回卒）

鎌野 秀三（電23回卒）

◇中村伊作先生が定年退職

中村伊作（一）昭和44年4月1日～62年3月23日

一般教育で哲学の講義を永くもたれたご指導に対して、会員一同感謝いたしたいものです。

◇広川先生に勲三等瑞宝賞

62年春の叙勲で、広川友雄先生（現名誉教授）は、勲三等瑞宝賞に叙勲されました。工学部を中心に活躍されたことに対する叙勲は広川先生が最初です。お祝い申し上げます。

◇片山将道先生御逝去

工業化学科の片山将道教授は、昭和62年4月17日、病気のため逝去されました。享年65歳でした。片山先生は昭和41年4月から本学に勤務され、学監、学科主任、臨時経理長、臨時事務局長、学部長付、学部次長、研究所長などの要職につかれ、研究・教育だけでなく、管理部門でも多くの業績を残されました。ご冥福をお祈り致します。



◇元田稔先生御逝去

建築学科の元教員の元田稔先生は、昭和62年2月24日、病気のため逝去されました。享年85歳でした。先生は昭和28年10月から44年5月の定年まで専任として勤められ、その後56年まで非常勤として講義を続けられました。先生のご冥福をお祈り致します。

◇日本大学大学院工学研究科だより

61年度、次の2人に工学博士の学位を授与。

井上和人：ビベンジル、スチルベンおよびトラン構造を含む芳香族ポリアミド、ポリイミドおよびアゾポリマーの合成と性質 61. 7. 7

古賀唯夫：重度肢体不自由者の住空間計画に関する研究 62. 3. 16

井上君は工業化学科の18回卒で、現在、福島工業高等専門学校で助教授をしています。

また、昭和60年度大学院設備拡充費（土木工学科杉浦孝三教授、原忠勝助教授、村田吉晴専任講師）「コンクリートの耐久性に関する研究」による設備（総額4,180万円、恒温恒湿室、凍結融解試験機、高剛性試験装置）が昭和61年3月に完成し、現在、研究が進められています。

◇一般教育・情報関係研究棟の上棟式、鋳打式

63年4月完成予定の研究棟の上棟式と鋳打式は62年5月14日に行なわれました。

◇課外活動各部の活躍（62年1月～6月）

○アーチェリー部

第8回東北学生アーチェリーフィールド選手権大会（宮城県秋保）（%）個人優勝：藤野俊哉

○ボクシング部

東北地区大学ボクシングトーナメント大会（日大工学部）（%～%）団体：3位

○弓道部

第38回東北地区大学総合体育大会（インカレ）（福島）（%～%）団体：3位

○卓球部

インカレ 団体：3位

○空手道部

インカレ 団体：3位
型の部：個人優勝—千田裕也
組 手：個人3位—千田裕也

○水泳部

インカレ 400mメドレーリレー：3位
200m背泳：2位—藤原輝巳
100m背泳：3位—藤原輝巳

（この項学生課調べ）

◇郡山地域テクノポリス

昭和61年12月3日に、郡山地域テクノポリスの開発計画が、国から承認（全国で20番目）された。地域指定には、郡山市・須賀川市・鏡石町・石川町・玉川村・三春町が含まれ、研究・開発機能の展開のなかに、日本大学工学部が組み入れられています。

その郡山地域テクノポリス推進協議会の有志による工学部の見学会が5月20日に行なわれ、多くの関係者が参加しました。産・学・官の一体化をはかっている、工学部の動きが、今後注目されて行くものと思われます。

なお、須賀川市と玉川村にまたがる「福島空港」は68年ごろまでには開港する予定だそうです。

（た）

昭和63年度入学試験

日本大学工学部

*入学試験

○募集人員

土木工学科、建築学科	} 各学科130名
機械工学科、電気工学科	
工業化学科	-----80名
	計 600名

○試験科目

英語：英語Ⅰ、英語Ⅱ
 数学：数学Ⅰ、代数・幾何、基礎解析、微分・積分、
 確率・統計（ただし統計を除く）
 理科：「理科Ⅰ（物理の分野）、物理」、「理科Ⅱ（化学の
 分野）、化学」のうちから1科目選択

○受け付け期間 昭和63年1月11日(用)から
 昭和63年2月9日(火)まで

○試験日 昭和63年2月15日(日)

○試験場 (郡山) 日本大学工学部
 (東京) 日本大学経済学部
 日本大学法学部

○合格発表 昭和63年2月23日(火)

*推薦入学

指定校制度による推薦入学があります。
 募集人員は若干名

問い合わせ先 日本大学工学部入試係
 (電話0249-44-1300)

〔事務局便り〕

- 今年の3月、会員各位に「現況調査」をお願いしましたところ、4,847名の会員から「訂正票」が寄せられました。ご協力ありがとうございました。61年6月から62年5月にかけて、この「訂正票」も含めて、6,687名の訂正がインプットされています。
- これらの訂正作業を終了した時点でアウトプットして、それを基に「62年版会員総合名簿」を発刊しました。約600ページの大冊です。すでに予約されている会員には、9月中にお送りできる予定です。
- 余裕もありますので、購入ご希望の会員は、代金（郵送料とも3,000円）を、現金書留で送るか、郵便局から振替で送るかして申し込んで下さい。
- 表紙の写真ののっている「日大通り」の歴史
 1. 金山橋からの舗装工事は昭和38年に始まり、日大西門までの1540mの中員16mの舗道が完成したのは44年。
 2. 通りの両側に街路樹として、イタリアポプラ(カローナポプラ)が植えられたのが44年。
 3. 歩道部分の舗装が完成したのは47年。
 4. 現在では西門から南方の徳定方面まで舗装が伸びていて、徳定まで定期バスが運行。

第7回母校を訪ねる会

日時 昭和62年10月25日(日)
 対象 第15回卒業生（昭和42年3月卒業）
 なお、前日同級会等開催されて多数出席されるようお待ち致しております。
 該当しない校友の参加も歓迎（要連絡）

北海道支部

支部長 佐々木義則(土10回)江別生コンクリート(株)
 事務局長 松久 房夫(土19回)札幌市下水道局

東京支部

支部長 古村 和夫(土3回)古村建設株

東海支部

支部長 平野 卓(土3回)
 東京エンジニアリング(株)名古屋支社
 事務局長 河野 叶(土6回)福徳建設株

九州支部

支部長 矢俣 敏之(建8回)(株)大林組福岡支店
 事務局長 陶山 順一(建15回)(株)陶山建設

四国支部

支部長 谷久 嘉典(土8回)佃谷久工務店
 事務局長 北岡 保之(化14回)高松市下水道管理課

校友会報 第50号

発行部数 31,000部
 発行所 日本大学工学部校友会
 福島県郡山市田村町徳定字中河原1
 郵便番号 963-11
 電話番号 郡山(0249)44-1327
 振替口座番号 郡山5-1990
 発行日 昭和62年9月1日
 発行者代表 会長 武田 仁 幸
 編集者代表 事務局長 佐藤 光 正